# 19［評論］　『政治的思考』

　フランス革命以来、主権は国民という単位と結びついて、国民主権という形をとっています。この国民という単位はかなり①恣意的に形成されたものです。誰と誰がある国民に属し、誰は違うのかということに、あまり強い根拠があるわけではありません。先祖がたまたまある時点である場所にいたという以外の意味を見出せない場合が多い。そのように根拠に乏しい単位であるにもかかわらず、国民というものが非常に大きな意味をもたされたのはなぜかといえば、それは絶対的な決定単位を決めたいというａヨクボウに発しているのです。あえていえば、何でもいいから安定的な単位を決めて、そこに権力をもたせたいというのが、私たちの近代国家システムなのです。

　君主主権の場合は、王が絶対的な権力をもち、その領地の臣民に対して権力が行使されます。権力の主体と客体が明確に分かれているわけですから、②これはわかりやすい。それに対して、国民主権の場合、国民が全体として絶対的な権力をもっているとされるわけですが、その権力は誰に対して行使されるものかというと、国民自身に対してということになります。国民全体が、権力の主体であるのと同時に客体であるわけです。これは非常にわかりにくい。なぜこんな無理をしてまでも国民が中心的なものとして考えられているかというと、それは主権という概念を成り立たせるためであり、主権をなぜ成り立たせるかというと、まさに支障なく決定をするためなのです。物事を決めるためには、決めるのは誰かを決めなければならない。そういう強いｂヨウセイの下で、この③主権という装置が無理矢理つくられ、維持されているということです。

　主権があることによって、決める過程が円滑になる。主権的でない、他の単位が決定しても、それは場合によっては捨てられてしまう。いろいろな地域から声が出てきても、それは主権の前では雑音として無視される。要するに、主権があることによって、決定過程は整理されますが、それは同時に、多くのものが顧みられることなく捨て去られる可能性を意味するのです。迷惑施設が一部の地域に押しつけられ、それについて地域住民がどんなに抗議してもどうにもならない、といった形で、主権の作用は現れます。

　ところが、④こうした状況に、大きな変化が見られるようになっています。ある閉ざされた国境線の中に囲い込まれた国民が最終的に決める主体である。そのことが、国内の一部の人びとにとって不利益であったりｃリフジンであったりするだけではなくて、より広い範囲にとって、合理的な決定に結びつかない可能性が出てきている。それがいわゆる⑤「リスク社会」といわれる問題です。原発事故などの場合に典型的ですが、それがもたらすｄオセンなどの影響は国境を越えて広がります。しかし、原発をつくるかどうか、そしてどこまでの安全対策をするかといったことは、それぞれの主権国家で決められることになってしまっており、隣の国も口が出せません。こうしたことが合理的と言えるでしょうか。また、経済活動が国境を越えて行われている時代に、ある主権国家の決定が他の国の経済にまで重大な影響を及ぼすのに、国民という単位でそれぞれ勝手に経済的な決定を行うことがよいのかどうか。

　誰が決めるかをあらかじめ決めておくというｅワクグみが、合理性を確保できないような状態が生まれているのです。にもかかわらず、主権の概念にしがみつき、国民という単位に閉じこもることで、何とかしようとあがいているのが政治の現状です。

●語注

典型的＝その類の特徴をよく表しているさま。

◆漢字

本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①の意味として最も適当なものを次から選べ。6点

ア　しぶしぶ　　イ　わざと　　ウ　適当に

エ　気ままに　　オ　曖昧に

〔　　　〕

問２　傍線部②の指示内容を簡潔に答えよ。6点

〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　次の表に適当な語を入れて表を完成させよ。2点×4

　　　　　　　　主体　　　　　　　客体

君主主権　ア〔　　　　　〕　イ〔　　　　　〕

国民主権　ウ〔　　　　　〕　エ〔　　　　　〕

問４　傍線部③の存在理由を答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　 国民主権のマイナス面を本文中から二五字以内で抜き出せ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部④の内容に合致するものを次から選べ。7点

ア　主権的でない他の単位が決定しても無意味である。

イ　地域住民がどんなに抗議してもどうにもならない。

ウ　迷惑施設の押しつけを受け入れなければならない。

エ　主権があることで、決定過程が整理される。

オ　いろいろな地域の声を聞かなければならない。

〔　　　〕

問７　傍線部⑤の例としてあてはまらないものを次からすべて選べ。 7点

ア　熱帯雨林の減少　　　イ　地震による津波被害

ウ　福島第一原発事故　　エ　世界金融危機　　オ　火山の噴火

〔　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａ欲望　ｂ要請　ｃ理不尽　ｄ汚染　ｅ枠組（み）

問１　エ

問２　君主主権

問３　ア＝君主（王）　イ＝臣民　ウ＝国民　エ＝国民

問４　物事を円滑に決めるため（物事を支障なく決めるため）

問５　多くのものが顧みられることなく捨て去られる可能性（24字）

問６　エ

問７　イ・オ

■覚えておきたい語句

□1主権……………………国家を統治する最高権力。

□2恣意……………………思いつくままの考え。思いのまま。

□5絶対的…………………比較できるもののないさま。〔反〕相対的

□8主体……………………物事の中心となるもの。主観。〔反〕客体

□9客体……………………人間の意思や行為を受ける対象。客観。〔反〕主体

□13概念……………………物事の概括的な意味内容。

□16円滑……………………物事が滞りなく行われること。

□23合理的…………………道理に合い、無駄のない様子。

□24典型的…………………その特徴や性質をよく表しているさま。

〔要　約〕

　本文の論理は、［1］段落から［5］段落へ向けて順次展開していっている。したがって、本文の要となる［5］段落を中心に要約すればよい。

　　　　　↓

ある主権国家の決定が他の国に影響を及ぼす「リスク社会」問題が出現し、国民主権の合理性を確保できない状態が生まれている。にもかかわらず、主権の概念や国民という単位に閉じこもっているのが今の政治の現状だ。（100字）

〈筆者＆出典〉杉田　敦（すぎた・あつし）一九五九年（昭和34）群馬県生まれ。東京大学法学部卒業。法政大学法学部教授。専門は、政治理論・政治思想史。著書に、『権力の系譜学』『境界線の政治学』『政治への想像力』『デモクラシーの論じ方』などがある。本文は、『政治的思考』（岩波新書、二〇一三年）より。

【読みのセオリー】

★言葉の定義をおさえる

　評論では、しばしば知らない言葉が出てくることがある。しかし、初めての言葉だからといってビクビクする必要はない。文章の核になる言葉は、必ず文章の中で定義されていたり、きちんと説明されている。その言葉の前後を丁寧に読み、どのような意味で用いられているかをきちんと把握して問題に取り組むことが大事である。

■読みのセオリー［実践］言葉の定義をおさえる

問７　「リスク社会」とは？

ある国内での決定

　　↓

［１　　　　　］を越えた、より広い範囲にとっては、

［２　　　　　］な決定に結びつかない可能性がある。

「リスク社会」といわれる問題

　　　＝

ある国の決定が、［３　　　　　］にまで影響を与える問題。

〔解答〕　１国境　２合理的　３他の国

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊新問

問　空欄Ａ～Ｃに入る最も適当な語句を次から選べ。（Ａ18行目・Ｂ21行目・Ｃ27行目）

　ア　ところが　　イ　また　　ウ　それでも　　エ　要するに　　オ　逆に

［答］　Ａ＝エ　Ｂ＝ア　Ｃ＝イ

＊差し替え

問３　君主主権と国民主権の違いを、「主体・客体」の言葉を用いて説明せよ。

［答］　君主主権は、権力の主体と客体が明確に分かれているが、国民主権は、国民が権力の主体でもあり、客体でもある。

＊新問

問　各段落の説明として適当なものを次から一つ選べ。

ア　［1］段落は、君主主権と国民主権を対比して述べている。

イ　［2］段落は、君主主権のメリットを述べている。

ウ　［3］段落は、国民主権のメリット・デメリットを述べている。

エ　［4］段落は、「リスク社会」問題の問題点を指摘している。

オ　［5］段落は、現状に対する筆者の批判が述べられている。

［答］　ウ